

古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(4)

安 藤 充

キーワード：古ジャワ語、Sārasamuccaya、Mahābhārata

前3編¹⁾に続き、Sārasamuccaya 第111偈から第150偈に関して、本文でテキスト（サンスクリット偈と古ジャワ語解説）のローマ字転写と日本語訳を提示し、注でテキストの典拠やその異読に関する情報（新知見も含む）を記録し、翻訳や解釈に関わる問題点を指摘していく。

111.

kruddhaḥ pāpāni kurute kruddho hanyād gurūn api /

*kruddhaḥ parūṣayā vācā naraḥ sādḥūn api kṣipate //*²⁾

怒り狂う者は悪事をなす。怒り狂う者は長上者すら殺しかねない。

怒り狂う者は修行者にすら罵詈雑言を浴びせる。

kunañ ikañ kakawaśā de niñ krodhanya / niyata gumawe ulah pāpa / makānta ñ wēnañ amātyani guru / wēnañ ta ya tumiraskāra sañ sādhu / tumēke sira parūṣawacana //

怒りに支配された人は、悪事を働くこと必至であり、しまいには、年長者を殺したり、聖者にひどい言葉をぶつけて侮辱したりもする。

112.

vācyāvācyam prakupito na vijānāti karhicit /

*nākāryam asti krudhhasya nāvācyam vidyate kvacit //*³⁾

憤った者は言うべきこと言わざるべきことの分別が全くつかない。

怒った者には、なさざるべきこと、言わざるべきことなどどこにも見当たらない。

lawan lwir niñ kakawaśā de niñ krodha / tan wruh juga ya ri salah kēna⁴⁾ niñ ujar / tātan wruh ya riñ ulah larañan / lawan adharma / wēnañ umujarakēn ikañ tan yukti wuwusakēna //

怒りに支配された人の様子は、またこのようである。言うことの良し悪しがわからな

い。禁じられた、あるいは不道德な行為が（何か）全くわかっていない。（それで）言うにふさわしくないことを口にしてしまう。

113.

krodhaḥ śatruḥ śārīrastho manuṣyāṇāṃ narottama /
yaḥ krodhalobhau tyajati sa loka pūjyatām iyāt //⁵⁾

すぐれた方よ、怒りは人間の体内に宿る敵である。

怒りと貪欲とを捨離する者は、世間で称賛されるべきである。

paramārtha nikaṅ krodha nāranya / musuh űke riṅ śārīra juḡa ya / hana pwa sira tumiṅgalakēn
ikaṅ krodha / sira ta kinatwaṅan / inalēm / pinūjā an hanēn rāt⁶⁾ //

真の意味で、怒りというのは、体の中にある敵である。怒りを捨て去った人がいれば、その人はこの世で敬われ、称賛され、崇められる。

114.

devatāsu viśeṣeṇa rājasu brāhmaṇeṣu ca /
niyantavyo bhavet krodho bālavṛddhātureṣu ca //⁷⁾

怒りは、とりわけ、神々に対して、王に対して、バラモンに対して、また、子供や年寄
や病人に対しては、抑えなければならない。

riṅ maṅke taṅ krodha / prihan tēmēn kahrētanya / lwirnya / riṅ dewatā / riṅ saṅ prabhu / riṅ saṅ
brāhmaṇa / riṅ rare kunaṅ / ikaṅ sēḡēn muṅḡū⁸⁾ / riṅ wwaṅ atuha kunaṅ / irikaṅ tēlas lilu / wwaṅ
alara kunaṅ / i samaṅkana ikaṅ krodha prihēn tēmēn kahrētanya //

怒りはこのようであるから、本当にしっかりと抑制するように努めなければならない。
たとえば神々に対して、王に対して、バラモンに対して、また、思春期の子供に、年老
いて衰えた人に、また、病いのある人に対して。このような人々に対しては、努めて怒
りを抑えなければならない。

115.

dharmārthahetoḡ kṣamatas titikṣoḡ śāntir uttamā /
lokasamgrahaṅārthaṃ vai sā tu dhairyeṇa labhyate //⁹⁾

正義や財産のために耐え忍ぶ者にとって、寂静は最上である。

世の人々をなだめるためにこそ、寂静は忍耐によって獲得される。

lawan waneḡ / ika saṅ kōlan riṅ panastīs¹⁰⁾ / riṅ kasiddhan iṅ dharma / artha / kōlan ta sira ri
halahayu niṅ uḡar / katēmu ta paḡḡēm niṅ krodha de nira / makanimitta kadhīran ira / kākarṣaṇa
ikaṅ loka de nira //

また他には（こう言われる）。正義や財産の成満のために、寒暑に耐える人、発する言

葉のよし悪しに気をつける人は、自制によって怒りを減するに至る。世の人々は彼らに惹きつけられる。

116.

nāstikyam vedanindāṃ ca devatānāṃ ca kutsanam /
dveṣaṃ dambhaṃ ca mānaṃ ca krodhaṃ taikṣṇyaṃ ca varjayet //⁽¹¹⁾

人は無神論、ヴェーダの誹謗、神々の非難、憎悪、偽善、傲慢、怒り、辛辣さを避けるべきである。

nihan ta prakāra / niṅ aryakēna / Iwirnya / si tan pamituhu ri hana niṅ paraloka / lawan phala niṅ śubhāsubhakarma / kanindān saṅ hyaṅ weda / kanindān iṅ dewetā / īrṣyā / si puḡyan⁽¹²⁾ māwak / si ahankāra / krodha / panasbara⁽¹³⁾ / rēṅō-rēṅōn / samaṅkana ṅ aryakēna / dohakēna saṅke ṅ manah //

次のように以下のものを捨て去るべし。すなわち、あの世や善業悪業の果が存在することを認めないこと⁽¹⁴⁾、ヴェーダ聖典を批判すること、神々を非難すること、嫉妬、自慢、我執、怒り、癩癩⁽¹⁵⁾。これらを常に心して排除すべきである。心から遠ざけておかねばならない。

117.

sandigdhe 'pi pare loka tyājyam evāsubhaṃ budhaiḥ /
yadi nāsti tataḥ kiṃ syād asti cen nāstiko hataḥ //

あの世の存在が疑わしいとしても、賢者は悪を捨てるべきである。

もし（あの世が）存在しなければ何もおこらないことになるし、存在するのなら、無神論者はおしまいだ。

yadyapin saṅśayā kēta ṅ wwaṅ ri hana niṅ paraloka / mwaṅ phala niṅ śubhāsubhakarma / tathāpin maṅkana / aryakēna juga ikaṅ aśubhakarma / liṅ saṅ hyaṅ āgama / siṅgahana ikaṅ karma senuhutakēn saṅ paṅḡita / lēṅoka pwa rakwa saṅ paṅḡita / adwā saṅ hyaṅ āgama / ri hana niṅ swarganaraka / tan paphala ikaṅ śubhāsubhakarma / tan hana tah kociwa niṅ umituhu warah saṅ paṅḡita / sumiṅgahana ṅ aśubhaprawṛtti liṅ saṅ hyaṅ āgama / apagēh pwa saṅ hyaṅ āgama / niyata maphala niṅ śubhāsubhakarma / ndah hilaṅ nāstikāwas / kakēlēmanya⁽¹⁶⁾ riṅ niraya //

あの世の存在や善行悪行の果を疑う人がいるとしても、悪行はやめるべきである、と聖典は説く。賢者を否定するとか賢者を信用しないような行為は避けなければならない。極楽や地獄の存在に関して聖典が間違っており、善行悪行が果を結ばなければ、賢者の教えを受け入れるような劣った人はいなくなる。（それでも）悪行を捨てなさいと聖典は説く。聖典は確固たるものであり、必ず善行悪行の果がもたらされるとする。とすれば無神論者の破滅は必至で、地獄に沈むことになる。

118.

na dṛṣṭapūrvam pratyakṣam paralokam vidur budhāḥ /
āgamāṃs tv anatikramya śraddhātavyam vijānatā //¹⁷⁾

あの世はかつて見られたことはないし、現前するものではないと賢者は知る。
よく知る者は、聖典を踏み越えることなく信じるのが肝要である。

tan pratyakṣa kēta pañawruh sañ paṇḍita riñ hana niñ paraloka / swarganaraka / kunēñ apan
apagēh¹⁸⁾ sañ hyaṅ āgama pinramāñākēñ ira / matañnyan pratyakṣa lwir niñ wruh nira //

あの世、(すなわち)天界と地獄の存在に関して確かな証拠はないと賢者は知る。なぜ
なら、一途に聖典を正しい知識の根拠としているからである。それ故、現前するものが
賢者の知るすべてである¹⁹⁾。

119.

aprāmānyaṃ ca vedānām sāstrāṇām cātīlañghanam /
sarvatra cānavasthānam etan nāśanam ātmanah //²⁰⁾

ヴェーダ聖典の権威を認めず、教説に背き、あらゆるところで不品行であれば、自らの
破滅となる。

lawan ta waneh / yan tan pramāñākēñ warah sañ hyaṅ weda / tan pituhun warah sañ hyaṅ
dharmaśāstra²¹⁾ kunēñ / mwañ tan tūtakēna pakṣa sañ hyaṅ āgama / niyata hilāñ niñ ātma /
punarbhāwa waluy-waluy riñ sañsāra //

他の人々はまたこう言う。もしヴェーダ聖典の教えを正しい知識の根拠とせず、法典の
教えを受け入れず、聖典の見解に従わないとすれば、必ずや自らを滅ぼすことになる。
輪廻転生を繰り返すことになる。

120.

anāstikaṃ bhinnamaryādaṃ kūle vātam iva sthitam /
vāmataḥ kuru viśrabdham naram reṇum ivoddhatam //²²⁾

常軌を逸した無神論者は、土手の風が埃を巻き上げて運び去るごとく、
ひるむことなく放り捨てるべきである。

hana mara wwañ nāstika / tan pamituhu ri hana niñ śubhāśubhakarmaphala / umambah ikañ
senuhutakēñ sañ hyaṅ āgama / yadyapin asēgēha ya ri kita tuwi / dohana juga ya / haywa kita
tēñēñ iriya / apan tan pahinya lawan anin adrēs ri piñgir in lwah / rūpa niñ baśa²³⁾ manūb
anibākēna / hanan kadi lēbū²⁴⁾ mēlēk rūpa niñ niyata malitana māla²⁵⁾ //

確かに無神論者がいて、善行悪行の果が生じることを否定し、あえて聖典を否定する。
(そういう人が)そなたにとっては賓客としてもてなすべきであるとしても、避けるべ

きである。その者への気配りなど無用である²⁶⁾。なぜなら、川岸の疾風と相違ないからである。(風は) 猛烈な速さで吹き下ろして、汚れをつける埃を巻き上げてしまう。

121.

ye nāstikā niṣkriyās ca guruśāstrīlaṅghinaḥ /
vihimsakā durācārās te bhavanti gatāyusaḥ //²⁷⁾

妄言、儀式を行わず、師や教説を蔑ろにし、ひとを害し、不品行な無神論者、彼らも命の終わりを迎える。

ikañ wwañ nāstikā / wwañ niṣkriya kunañ / niṣkriya naran iñ wwañ tan paniddhākēn triwarga /
wwañ tan pamisingih rasa sañ hyañ āgama / warah-warah²⁸⁾ sañ guru kunēñ / wwañ hiṅsaka
prawṛtti kunēñ / wwañ durācāra kunēñ / ika ta wwañ mañkana kramanya / ya ika māti naranya //
無神論者は、行為をしない人である。行為をしない人とは(人生の) 三目的²⁹⁾を成し遂げない人である。(また無神論者は) 聖典の精髓に従わず、師の教えを聞かない人である。(また) 人を害する人、品行の悪い人である。(無神論者とは) このような人である。(そういう人は) 死ぬと言われる。

122.

aihalaukikam īhante māṃsaśonitavardhanāḥ / pāralaukikakṛtyeṣu prasuptā bhṛśanāstikāḥ //³⁰⁾

極め付けの無神論者たちは、俗世のものを追求し、血肉を増やす。

来世のためにすべきことに対しては無為である。

nihan ta krama nikañ nāstika / kewalāwaknya juga iniñunya / yatna ri wṛddhya niñ rah dañginya /
sāsiñ prawṛtti maphala mañke linēkasakanya / kunañ ikañ prawṛtti maphala swargāpawarga
dēlāha / aturū³¹⁾ ya irika / tan wawarēñēh³²⁾ wih //

無神論者は次のようである。自分の体だけを大事にし、血肉を増やそうと努める。(それに対する) あらゆる行為が結果をもたらすので、そのように行動するのである。しかし、将来的に天界および輪廻からの解脱という果を得るための行為に対しては眠りかけている。全く耳を貸そうとしない。

123.

dve karmañi naraḥ kurvann iha loke mahīyate /
abruvan paruṣaṃ kiñcid asato nārthayaṃs tathā //³³⁾

ひとはこの世で二つのことを行って尊敬される。

辛辣なことを一言も言わず、悪人にもものをねだることなく。

kunañ liñ mami / rwa ikañ ulah nimitta ni wwañ inastuti / lwirnya / ikañ pisanīnu mujarkēna ñ
paruṣawacana / ikañ pisanīnu kumira-kira ñ ulah tan yukti kunañ / samañkana ikañ wwañ pinuji

n³⁴⁾ hanên rât //

私の説はこうである。ひとが褒められる原因となる行為は二つある。それはといえば、(第一に) 決してきついことを言わないこと、(第二に) 決して不適切な行為を企てないことである。そうすればひとはこの世で称賛される。

124.

samyag alpaṃ ca vaktavyam avikṣiptena cetasā /

vākprabandho hi samrāgād virāgād vā bhaved asan //³⁵⁾

精神をととのえ、正しく言葉少なに話すのがよい。

悪い言葉を延々と続けるのは情熱あるいは無関心が原因である。

ika tañ ujarakēna / rahaywa ta ya / haywa winistārākēn³⁶⁾ / haywa hyun-hyun kawarjanânucap /
apan ikañ ujar yan jambat / hana ñ harṣa / hana ñ³⁷⁾ ilik pinuharanya / tan rahayu ta ñaran ika //

話し方はこうするべきである。正しく、冗長にならず、(かといって) 端折って話すことにかまけてもいけない。というのは、だらだらした話は、笑いや嫌悪感を招くからである。(だから、そういう話し方は) 正しくないと言われる。

125.

abhyāvahatī kalyāṇaṃ vividhaṃ vāk subhāṣitā

saiva durbhāṣitā pumsām anarthāyopapadyate //³⁸⁾

正しく発せられた言葉はさまざまな幸運をもたらす。

悪く語られた言葉は人を不幸にする。

apan ikañ ujar yan rahayu / rahayu ta kojaranya / tan tuṅgal ikañ sukha kapuhara denya /
yadyapin rahayu towi / yan tan rahayu kojaranya irikañ umujarakēnya tuwi / pwan pamuhara lara //

なぜなら、正しい言葉であれば、(つまり) 話されることが適切であれば、それによってさまざまな幸がもたらされる。(姿形が) 美しくとも³⁹⁾、言葉を発したときに、その話が美しくなければ、苦痛を招く。

126.

vāksāyakā vadanān niṣpatanti yair āhataḥ śocati rātryahāni /

parasya vā marmasu te patanti tasmād dhīro nāvasṛjet pareṣu //⁴⁰⁾

言葉の矢は、口から発して、それに当たると、ひとは昼夜なく悲しむことになる。

相手の急所に当たるからである。それゆえ、賢者は相手に当たらないようにする。

ikañ ujar ahala⁴¹⁾ tan pahi lawan hrū⁴²⁾ soṅkabnya sakatēmpuhan denya juga alara / rēsēp ri hati /
tātan kēnēn pañan turu riñ rahina wēñih ikañ wwañ denya / matañnyat tan inujarakēn ika de sañ

dhīrapuruṣa⁴³⁾ / sañ ahēniñ manēb⁴⁴⁾ manah nira //

悪い言葉は矢のように、開いているところはどこでも襲って、心の奥底に痛みを与える。それで人は昼も夜も食事や睡眠がとれなくなる。それゆえ、そなたは、自己抑制した、(すなわち)心が清らかで沈着冷静な人がするように話すべきである。

127.

marmāny asthīni hṛdayaṃ tathāsūn ghorā vāco nirdahantīha puṃsām /
tasmād vācaṃ ruṣatīm tīkṣṇarūpām dharmārāmo nityaśo varjayet tām //⁴⁵⁾

荒々しい言葉は世の人々の急所や骨や心や、はたまた命を焼き尽くす。

それゆえ、法を喜びとする者は、ひとを傷つけるきつい言葉を常に避けるべきである。

nihan ta denyānlare / rēsēp riñ prāṇa / susuk ri hati / tēkēn tahulan / matañnyan aryakēna ika de
sañ dharmika //

このように(酷い言葉は)命の奥底、心の中、骨の髄まで苦痛を与える。それゆえ、法に従う者はそれを捨て去るべきである。

128.

saṃprohati śanair vidhāṃ vanaṃ paraśunā hatam /
vācā duruktaṃ bībhatsaṃ na saṃprohati tatkaṣṭam //⁴⁶⁾

斧で切り開かれた森はゆっくりと再生するが、

悪しざまに語られ、嫌悪をもたらす言葉による傷は、癒やされることがない。

apan ikañ alas / binabad pinaharadin / tumuwuh niyata nika pūrṇa muwah / kunañ ikañ manah
linaran in ujar alarāhala / tan tuwuh ika / kaliñanya / tan panuwuhakēn buddhi ujar ahala //

森はすっかり伐採されても、いつか必ず元どおりに再生する⁴⁷⁾。しかし、苦痛を与える酷い言葉に傷つけられた心は癒やされない。つまり、酷い言葉は心を立ち直らせることがない。

129.

hīnāṅgān atiriktāṅgān vidyāhīnān vigarhitān
rūpadraṇṇahīnāṃś ca sattvahīnāṃś ca nākṣipet //⁴⁸⁾

指が少ない者、指が多い者、学がない者、そしりを受ける者、美貌や富に欠ける者、生命力の弱い者を侮辱してはならない。

nya n inilagakēn / hana wwañ wikāra / kurañ lēwih awayawanya / tan wruh mañaji kunañ / wwañ
durbhaga⁴⁹⁾ / durbala inupēt kunañ / wwañ ahala / wwañ tan pamās / wwañ mūdha / wwañ wēdi-
wēdi kunañ / yatika tan tiraskāran tan uyan⁵⁰⁾ / pāwak niñ pārūṣya n ujar⁵¹⁾ mañkana //

普通と違うので排除されてしまう人たちがいる。(たとえば)四肢が少ない人、多い人、

学問を知らない人、幸薄く、非力で、罵られる人、醜い人、富裕でない人、愚か者、小心者。こういう人を侮辱してはならない。追い立ててはならない。(そのようなことをする者は) そうした酷い発言の権化である。

130.

nākrośam icchen na mṛṣā vadec ca na paśūnaṃ janavādaṃ ca kuryāt /
satyavrato mitabhāṣo 'pramattas tasya vāgdvāram upaiti guptim //⁵²⁾

罵詈雑言を好んで言うべきではない。偽りを言うべきではない。辛辣な言葉や噂は口にすべきではない。

言ったことは必ず守り、口を慎み、注意を怠らなければ、その人の言葉の門は鉄壁な守りとなる。

matañnyan mañke sañ mahāpañḍita / sañ makabrata n⁵³⁾ kasatyan / tan pañuman-uman / tan pagawai paśūnya / tan pañupēt⁵⁴⁾ / ñuniweh tan mṛṣāwāda / yatna juga sira amihēri ujar nira / rumakṣa hala niñ len //

さらにそれゆえ、すぐれた賢者はこのようにする。誠実を生活信条とし、ひとを誇らず、きつく当たらず、誹謗中傷せず、さらに、嘘を言わない。努めて言葉を慎む。(こうして) 他人の邪悪から(自らを) 守るのである。

131.

pratyakṣaṃ guṇavādī yaḥ parokṣe tu vinindakah /
sa mānavaḥ śvaval loka naṣṭalokaparāyaṇah //⁵⁵⁾

人前では長所を褒め、陰では非難するような人は
犬と同様、世間から見捨てられる。

kunañ ikañ wwañ mañke kramanya / yan ri harēp ya n⁵⁶⁾ pañalēm / añupēt yan ri wuri / ya ika crol ñaranya / n hanēn rāt / dūra n tēmwa n⁵⁷⁾ hayu riñ ihatra paratra //

他方、次のような人がいる。人前では褒め、裏では誇る。それはこの世では裏切りと言われる。(そういう人は) 現世でも来世でも幸福を得ることはあり得ない。

132.

na vācyah parivādo vai na śrotavyah kadācana /
kañau vāpi pidhātavyau gantavyaṃ vā tato 'nyataḥ //⁵⁸⁾

いついかなるときも、非難は口にすべきでなく、また耳にすべきでない。

耳をふさぐか、よそに行くべきである。

matañnyat tan ujarakēna juga kopētan in len / tan rēñōn / tukupana n taliña mūra kunēñ.

それゆえ、そなたは、他人に対する非難は口にしてはいけぬ。聞いてもいけぬ。耳

をふさぐか、あるいは（その場から）立ち去りなさい。

133.

satyadharmacyutāt puṃsaḥ kruddhād āśviṣād iva /

nāstiko ‘py udvijeteḥa janaḥ kiṃ punar āstikaḥ //⁽⁵⁹⁾

誠実さや正義を欠いて怒り狂う人は、毒蛇のごとく、

無神論者でさえ避けるべきである。ましてや、信心ある者なら。

ikañ wwañ nāstika tuwi / atakut juga ya riñ wwañ mithya / wwañ gōñ krodha / katuhwan apa tan pahi mwañ sarpa ikañ wwañ mañkana / haywa ta winuwus sañ dhārmika //

無神論者でさえ、約束を守らない人やひどく怒る人を恐れる⁽⁶⁰⁾。そのような人は蛇と同じという理由からである。正しい教えに従う人⁽⁶¹⁾は言うまでもない。

134.

amṛtaṃ caiva mṛtyuś ca dvayaṃ dehe pratiṣṭhitam /

mṛtyur āpadyate mohāt satyenāpadyate ‘mṛtam //⁽⁶²⁾

不死と死の両方が、体内に存在する。

死は迷妄より生じ、不死は真実によって獲得される。

tan madoh marikañ wiṣa / mwañ amṛta / ŋke riñ śārīra kahananya / kramanya / yan apuñguñ ikañ wwañ jēñek riñ adharma / wiṣa katēmu denya / yapwan atēguh riñ kasatyan / mapagēh riñ dharma / katēmu ŋ amṛta //

毒と甘露⁽⁶³⁾は遠からず、(いずれも)体のうちにある。(それは) こういうことである。正義に悖ることに耽る愚か者は毒を得る。誠実さを守り正義にゆるぎなければ、不死の甘露を得る。

135.

na yajñaphaladānāni niyamās tārayanti hi /

yathā satyaṃ paraṃ loke puruṣaṃ puruṣarṣabha //⁽⁶⁴⁾

供犠の果報や布施や誓戒は、

至高の誠実さがこの世で人々を救済するほどではない、指導者よ。

nihan ta kottaman iñ kasatyan / nā ŋ yajña / nā ŋ dāna / nā ŋ brata / kapwa wēnañ ika mañēntasakēñ / sor tika de niñ kasatyan / riñ kapwa añēntasakēñ //

人が誠実さの卓越は以下のようなものである。例えば、供犠や布施や誓戒⁽⁶⁵⁾は、いずれも救済する力はあるが、すべてを救済する点で、誠実さには及ばない。

136.

brāhmaṇo vā manuṣyāṇām ādityo vāpi tejasām /
śiro vā sarvagātrāṇām dharmāṇām satyam uttamam //⁶⁶⁾

人間ではバラモンが、光輝では太陽が、
体では頭が、正しい行いでは誠実さが最上である。

yan riñ janma mānuṣa⁶⁷⁾ / brāhmaṇa sira lēwih / kunēñ yan riñ teja / sañ hyaṇ āditya sira lēwih /
yan riñ awayawa / nā n pāñipādādi / hulu ikañ wiśeṣa / yapwan riñ dharma / ñhiñ kasatyan wiśeṣa
//

人間の生まれではバラモンが優れている。光輝では太陽が優れている。体の部分、たとえば手や足などでは、頭が優れている。規範では、誠実さこそ優れている。

137.

yaḥ parārthe ‘paharati svām vācam puruṣādhamah /
ātmārthaṁ kiṃ na kuryāt sa pāpanarakanirbhayaḥ //⁶⁸⁾

最低の人間は他人のために自らの言葉を奪う。
自分のためなら、罪も地獄も恐れず、何でも手を染める。

hana ta wwañ ujar makaphala lara niñ para / umakusāra siddha niñ kārya niñ para kunañ / ndān
mithyā ya / ikañ wwañ mañkana kramanya / tan atakut riñ naraka ika / takarin⁶⁹⁾ pagawayakēna
awaknya kapāpan naran ika / apan ikañ para prasiddha niñ mukti kapāpanya / sañkṣepa nika / tan
ujarakēna n ujar mañkana //

他人のために物事をやり遂げたと自慢しながら、結果的に他人を傷つけることを口にする人がいる。そのような人は（解き明かせば）こういうことである。すなわち、地獄を恐れず、自分のために悪をなすのではないかと。それゆえに、他人が害を被ることになる。

要するに、そのような言葉は口にしてはならない。

138.

satyām vācam ahiṃsām ca vaded aparivādinīm /
kalyopetām aparūṣām anṛṣaṃsām apaiśunām //⁷⁰⁾

誠実で、ひとを害せず、責めず、

褒め言葉を含み、辛辣でなく、冷酷でなく、誹謗しない言葉を話すべきである。

kunēñ lwir iñ ujarakēna⁷¹⁾ niñan / satya ta ya / haywa ta ya makāwak hiñsā / haywa makāwak
upēt / hitāwasāna ta ya / haywa ta pārūṣya / haywa kasēlatan gēlēñ / haywa nṛṣaṅsa / haywa
paiśunya / mañkana lwir niñ tan yogya ujarakēna //

次のような話し方をすべきである。真実であること。害を与えないこと。中傷しないこと。よい話で締めること。辛辣でないこと。怒りをこめないこと。冷酷でないこと。陰口しないこと。このように話すべきではない⁷²⁾。

139.

*dr̥ṣṭānubhūtam arthaṃ yaḥ pr̥sto na vinigūhate /
yathābhūtapravāditvād ity etat satyalakṣaṇam //*

見たり経験したりしたことを尋ねられたときに隠さず、
ありのままを語る。これが誠実さの特徴である。

*nihan lakṣaṇa niñ satya / hana ya tinañan tātan pawuni / mājar ta ya / yathābhūta / torasi ikañ
sakawruhnya / prawrttinya ikañ mañkana / yatika lakṣaṇa niñ kasatyan //*

要するに、誠実さの特徴はこうである。尋ねられても隠そうとせず、ありのまま、知っていることすべてを正しく話す。このような振る舞いは誠実さの特徴である。

140.

*na tathyavacanam satyam nātathyavacanam mṛṣā /
yad bhūtahitam atyarthaṃ tat satyam itaran mṛṣā //*⁷³⁾

真実を話すことが誠実ということではなく、真実でないことを話すのが不実ということでもない。

どこまでも命あるもののためになること、それが誠実であり、それ以外は不実である。
*kunēñ paramārhanya nihan / tan ikañ ujar adwā kētikañ mithyā nāranya / tan ikañ si tuhu satya
nāranya / kunēñ prasiddhanya / mon mithyā ikañ ujar / tēhēr mañde hita juga / magawe
sukhāwasāna riñ sarwabhāwa / ya satya naran ika / mon yathābhūta towi / yan*⁷⁴⁾ *tan pañde
sukhāwasāna riñ sarwabhāwa / mithyā naran ika //*

さて究極の意味はこうである。まちがったことを話すのが不実と言われるのではない。正しいこと（を話す）ならば誠実と言われるのもない。それで本当のところは（どうかといえば）、たとえ話が虚偽であっても、すぐにためになることを行い、一切生類にとってめでたい終わりとなれば、それは誠実と言われる。（反対に、話が）事実に基づいていても、一切生類に終わりが吉祥になるようにしなければ、不実と言われる⁷⁵⁾。

141.

*dharmārthakāmamokṣāṇām prāṇaḥ samsthitahetavaḥ /
tān nighnatā kiṃ na hataṃ rakṣā bhūtahitārthā ca //*⁷⁶⁾

生命は正義と富と欲と解脱が持続する理由である。

命を滅する者によって滅ぼされないものはない。生類の幸福を目指せば、命を守ること

になる⁷⁷⁾。

matanyan prihēn tikañ bhūtahita / haywa tan māsih riñ sarwaprāñī / apan ikañ prāña naranya /
ya ika nimitta niñ kapagēhan ikañ caturwarga / nāñ dharma / artha / kāma / mokṣa / hana pwa
mañilañakēn prāña / ndya ta tan hilañ de nika / mañkana ikañ rumakṣa riñ bhūtahita / ya ta
mamagēhakēn caturwarga naranya / abhūtahita naran ikañ tan karakṣa denya //

それゆえ、生類のためになるよう努めなければならない。命あるすべてのものに情けを
かけないようなことがあってはならない。なぜなら、命というのは、正義、富、欲、解
脱の四項目⁷⁸⁾が確固たるものになる根拠だからである。命を殺めるものがあるが、それ
によって滅ぼされないものは何もない。だから生類のために（命を）守るのである。そ
れが四項目を持続させると言われる。生類のためにならない、と言われるのは、（命を）
守らないことである。

142.

jīvitam yaḥ svayaṃ hīcchet katham so ‘nyān praghāyayet /
yad yad ātmani hīccheta tat parasyāpi cintayet //⁷⁹⁾

命ある自らの命を欲するものが、どうして他人を殺めることができようか。

自分に望むものはすべて、他人にも思い巡らすべきである。

apan ikañ wwañ n ahaṭ⁸⁰⁾ ri huripnya / apa nimitta nika n pañhilañakēn prāña niñ len / ika tātan
harimbawā kēta ya / ikañ sanukhana ry awaknya / ya ta añēn-añēñnya / riñ len //

なぜなら、自分の命を大事にする人が、どうして他人の命を奪うのか。それは全く思い
やりの心がない。自分に喜びを与えるすべてのものごとを、他人にも想像を働かせるべ
きである。

143.

yasyānte śvāpi caraṇau kurute mūrdhny aśankitaḥ /
sa kāyaḥ parapīḍanair dhāryata iti ko nayāḥ //⁸¹⁾

命終われば、犬ですら恐れもなく両足で頭を踏みつけるのに、

その体が他人を痛めつけるために維持されるとは、何の賢さがあるうか。

lawan ya waneh / ikiñ śarīra naranya / anitya pinakaswabhāwanya / tan lanā / apan ri pātinya /
tan pamūlya ya / mastakanya tuwi lināñkahan iñ śrgāla / an mañkana tattwanya / aparana ta rakwa
ya / iñuni⁸²⁾ makasādhana ñ parapīḍā / ndya ta yogya nika //

また他の人は（こう述べる）。この身体というのは、本性として無常である。不変では
ない。なぜなら、死んだら価値はない。山犬がその頭をまたいでいく。こういうことが
真実である。いったいどうして他人を痛めつけることによって（自らの命を）大事にす
るのか。それが正しいはずがない。

144.

krimayo bhasma diṣṭhā vā niṣṭhā yasyedrśī bhavet /

kāyo 'yaṃ palayaṃ piḍya yat kathaṃ paripālyate //⁸³⁾

虫や灰、糞便のような状態と化してしまう体を、
他人を痛めつけながら、どうして守るのか。

nihan marāvasthā nikiṃ śārīra / pilih hulēr / pilih hawu / pilih purīṣa tēmahanya / an maṅkana /
rakṣanta rakwa ya inun / makasādhana ṅ parapīḍā / apa ta nimittanya //

身体は次のような状態になる。あるいは蛆虫、あるいは灰、あるいは糞便に最後にはなる。それなのに、そなたは、他人を苦しめて、(自らを) 大事にして守るのか。その理由は何なのか。

145.

gacchatas tiṣṭhato vāpi jāgrataḥ svapato 'pi na /

phalaṃ bhūtahitārthāya tat paśor iva ceṣṭitam //⁸⁴⁾

歩こうが、立ってしようが、目覚めてしようが眠ってしようが、
結果が生類に利するのでなければ、獣の行動と同じである。

saṅkṣepanya / bhūtahita tikaṃ ulaha / apan ikaṃ wwaṅ lumaku / aluṅguh / ataṅhi / maturu kunēṅ /
ndātan pakaphala ṅ bhūtahita / tan hana pahi niṅ prawṛttinya lawan ulah in paśu //

要するに、生類のために行動すべきである。というのは、人は歩いたり、立っていたり、目覚めていたり、眠っていたりするが、結果として生類のためにならなければ、その行動は、獣のそれと異なる。

146.

ekaṃ sūte mṛgāriṇī bahūn sūte vṛkī sutān /

attāraḥ pralayaṃ yānti nādyamānāḥ kathaṅcana //⁸⁵⁾

雌獅子は一頭生み、雌狼は多頭を生む。

破滅に至るのは捕食者であって、捕食される者では決してない。

nihan pājara sakareṅ nān kidaṅ / sakatuṅgal de nika mānak / kunaṅ ikaṅ śrgāla / mānak ika
sakapitu nēm / kaliṅa nika / riṅ nēm pitu / tan ahurip ika kabeh / apan ikaṅ amañan / upalakṣaṇa
riṅ makārya riṅ hala / ya ika kagōnan in wighna / kunaṅ ikaṅ pinaṅan / salwir niṅ kinārya riṅ hala
/ taha ika //

次のように例えばホエジカ⁸⁶⁾について言われる。ホエジカは一度に一頭の子供をもうけるが、山犬は一度に6、7頭の子供を生む。その意味は、全部が生きられるわけではないということである。というのは、これは(彼らを) 捕食するものが罪悪をおかす事例

である。その苦難はとても大きい。他方、食われるほうは、すべて罪悪をおかされる対象であり、それ（苦難）はない。

147.

vadhabandhaparikleśān prāṇino na karoti yaḥ /
sa sarvasya hitaṃ prepsuḥ sukham atyantam aśnute //⁽⁸⁷⁾

命あるものを殺さず、捕まえず、苦しめず、
すべてのものの利益を希求する人は、究極の幸福を得る。

hana mara wwañ mañke / tapwan pagawe parikleśa riñ prāñī / tan pañapusi / tan pamāti / kewala
sānukana riñ prāñī tapwa ginawenya / ya ika sinañgah amañgih paramasukha nāranya //

次のような人がいる。命あるものを苦しめず、縛らず、殺さず、ただ、命あるものに喜びを与えるような行いをする。それは至高の幸福と呼ばれるものをもたらすと信じられている。

148.

yac cintayati yad yāti ratim badhnāti yatra ca /
tathā cāpnoty ayatnena prāṇino na hinasti yaḥ //⁽⁸⁸⁾

生類を傷つけない人は、思うこと、行き先、楽しみの対象などを、労もなく実現する。
kunēñ phalanya nihan / ikañ wwañ tan pamāti-māti n hanēñ rāt / senañēñ-añēnya / sapinaranya /
sakahyunya yatika sulabha katēmu denya / tan ulihnya kasakitan //

その果はこうである。この世に（命）あるものを殺さない人は、何を考えようが、どこへ行こうが、何を望もうが、すべて、容易に成就する。苦痛を与える者には手に入らない。

149.

rūpam avyañgatām āyur pūrñam prajñam śauryam smṛtim
prāptukāmair narair hiṃsā varjanīyā vai kṛtātmabhiḥ //⁽⁸⁹⁾

怒りから苦行を、美貌、完璧さ、長寿、豊かな知識、勇猛さ、記憶力を
獲得したいと思う人々は、自制心をもって、殺生をやめるべきである。

kaliñanya / yan kalituhaywan sādhyanta / paripūrña marya wikāra kunēñ / kadhīrgāyusañ kunēñ /
athawā kaprajñān / kaśūran / kaśaktin / tutur lañgēñ kunēñ / ikañ hiñsāprawṛtti haywa
ginawayakēñ //

意味するところはこうである。もし美貌を望むなら、また、完全に欠陥ないこと、長寿、あるいは博識、勇気、力、永続する記憶力を望むなら、殺生の行為は行ってはならない。

150.

abhayaṃ sarvabhūtebhya yo dadāti dayāparaḥ /

abhayaṃ tasya bhūtāni dadatītiha na saṃśayaḥ //⁹⁰⁾

慈しみを専らとし、一切生類に安心を与える人には、
一切生類が安心を与える。そこに疑いはない。

lawan waneh / ikañ wwañ umehakēn iñ abhaya / abhaya naranya / taya niñ wēdi / ya ta
winehakēnya riñ sarwabhāwa / wet niñ göñnyāsihnya / sinuwal riñ abhaya ika / de niñ sarwabhāwa
/ riñ ihatra paratra //

またほかに（こう説かれる）。安心を与える人。安心とは、怖れることがないことである。深い思いやりから、それを一切生類に与える人は、この世でもあの世でも⁹¹⁾、一切生類から安心のお返しをうける。

注

- * *Mahābhārata* (Mbh) ほか、サンスクリット偈で他の文献に見られる例については、本テキスト *Sārasamuccaya* (SS) での読みと異なる箇所の下線を付して示す。Mbh 校訂版の異読については、SS との関連で注目すべきものがある場合のみ言及する。

1) 安藤2018, 2019, 2020.

2) Cf. Mbh 3.30.4:

kruddhaḥ pāpaṃ naraḥ kuryāt kruddho hanyād gurūn api /

kruddhaḥ paraṣayā vācā śreyaso `py avamanyate //

なお、SS 校訂者 Raghu Vira (以下 RV) は言及していないが、シヴァ教パーシュパタ派の聖典 *Pāsupatasūtra* の注解書 *Pañcārthabhāṣya* (1.9.205) に本偈に相応する表現が含まれる：

kruddhaḥ karoti pāpāni kruddhaḥ pāpāni bhāṣate /

kruddho bhavati nirlajjastasmāt krodhaṃ vivarjayet //

3) Cf. Mbh 3.30.5:

vācyāvācye hi kupito na prajānāti karhi cit /

nākāryam asti krudhdasya nāvācyaṃ vidyate tathā //

4) RV は salahkna と一語に綴っているが、辞書 (Zoetmulder 1982, 以下 OJED) の登録と引用例 (p. 1611) に従って分かち書きに修正。

5) Cf. Mbh 3.197.31:

krodhaḥ śatruḥ śarīrastho manuṣyāṇāṃ dvijottama /

yaḥ krodhamohau tyajati taṃ devā brāhmaṇaṃ viduḥ //

SS のように moha を lobha とする異読も少なくないようだが、SS と Mbh が大いに異なる第4句については、Mbh の異読には類似するものが見られない。

6) 第98偈の古ジャワ語解説で、忍耐ある人に関して「この世で人々に褒め称えられ、畏敬の念をもたれる」と類似の表現を用いている：... manke inastuti pinūjā kinatwan sira de niñ rāt.

7) RV は *Indische Sprüche* (以下 IS) の典拠のみ言及するが、番号が間違っており、2974では

なく 2973 (Vol. 2, p. 155) である。なお IS では Mbh と Hitopadeśa での類例を番号のみで示しているの、ここでテキストをのせておく。

Cf. Mbh 5.38.27:

daivateṣu ca yatnena rājasu brāhmaṇeṣu ca /
niyantavyaḥ sadā krodho vṛddhabālātureṣu ca //

Cf. Hit 3.122:

devatāsu gurau goṣu rājasu brāhmaṇeṣu ca /
niyantavyaḥ sadā kopo bālavṛddhātureṣu ca //

SS のように “devatāsu”, “viśeṣeṇa”, “bhavet”, “bālavṛddha-” という読みを採用する Mbh 写本も見られる。中でも Devanāgarī 写本 D₉ は最初以外 3 つの異読が SS と一致しているのが興味深い。

- 8) RV は muṇḍu に疑問符をつけ、この読み方あるいは意味がはっきりしないことを示しているようだが、OJED (p. 1160) はこの語を採録し、ある植物の名称であるほかに、“of the age of the forming of the breasts” という意味を示し、本例を引用している。ここでは意味を汲んで「思春期の」と訳しておく。

9) Cf. Mbh 12.156.16:

dharmārthahetoḥ kṣamate titikṣā kṣāntir ucyate /
lokasaṃgrahaṇārthaṃ tu sā tu dhairyeṇa labhyate //

SS のように “kṣamatas” や “uttama-” という読みをもつ Mbh 写本もいくつか見られるようである。

- 10) 第40偈の古ジャワ語解説に、同様な言い回しが見られる：kōlanta riñ panasfīs.
- 11) RV は注記していないが、マヌ法典に同一の（一字一句相違がない）偈が含まれることを新たに見つけた。Manu 4.163 参照。
- 12) 校訂テキストの pūjyan という読みを、OJED の見出し語と用例 (p. 1433) にならって修正。
- 13) 校訂テキストの panasbhāra という読みを、OJED の見出し語と用例 (p. 1251) にならって修正。
- 14) 第80偈の古ジャワ語解説で、行為の結果の存在を認めることを、行うべきとして挙げており、同じ pi-tuhu- の派生語を用いている。
- 15) サンスクリット原文の dveṣa (憎悪) に対して、īrṣyā (嫉妬) という意味の異なるサンスクリット由来語を訳語に当てているのが特異である。また、taikṣṇya (辛辣さ) を panasbara (癩癩もち、きれやすい) とするの、古ジャワ語訳者・解説者が原文を正確に理解していなかったのか、伝承過程での何らかの変容があるのか、興味深い。
- 16) RV は kakēman ya と区切るが、OJED の引用例 (p. 842) の読み方を採用。

17) Cf. Mbh 12.28.41:

na dṛṣṭapūrvam pratyakṣam paralokam vidur budhāḥ /
āgamāṃs tv anatikramya śraddhātavyam bhubhūṣatā //

最後の 1 語のみ異なるが、一致・類似する異読写本はない。

- 18) 校訂テキストは apēgah としているが、OJED の見出し語 (pagēh) と本箇所引用例 (p. 1230) にならって修正。
- 19) サンスクリット偈では、来世は経験や知覚ではなく信じることだと説くのに対し、古ジャワ語訳者は、信仰 (śraddhā) には触れず、pratyakṣa に視点を置いて述べている点が注目される。

- 20) Mbh 13.37.11 は本偈と同一である。
- 21) サンスクリット偈の śāstra を古ジャワ語解説では dharmasāstra と踏み込んで述べている。
- 22) Cf. Mbh 12.309.15
nāstikam bhinnamaryādaṃ kūlapātam ivāsthiram /
 vāmataḥ kuru visrabdho naraṃ venum ivoddhatam //
 visrabdham と読む写本もあるが、それ以外で SS の読みに近いものはない。
- 23) 校訂テキストの basa を waśa との類推で修正。
- 24) 校訂テキストの lēbu を文意に沿って修正。
- 25) RV は “malit ? manamāla ?” とし、意味が取れず読みが不確かなことを記しているが、OJED (palit, p. 1247) が例示する読みを採用する。
- 26) サンスクリット偈で vāmataḥ kuru は直訳すれば「左におけ」の意味。古ジャワ語では否定辞をつけて「右」(tēñēn) という表現を用いている。なお atēñēn となると “paying attention to” という意味があるので、ここではその意味を汲んで訳しておく。
- 27) Cf. Mbh 13.107.11:
 ye nāstikā niṣkriyāś ca guruśāstrātilaṅghinaḥ /
adharmajñā durācārās te bhavanti gatāyusaḥ //
- 28) 校訂テキストの wara-warah を修正。
- 29) 古ジャワ語解説者がサンスクリット偈の niṣkriya (=niṣkarman) (“neglecting religious acts”) に対して、dharma・artha・kāma というヒンドゥー教の人生観にわざわざ言及する点が興味深い。
- 30) Cf. Mbh 12.309.9:
 aihalaukikam ṭhante māṃsaṣoṇitavardhanam /
 pāralaukikakāryeṣu prasuptā bhṛśanāstikāḥ //
 なお、Mahāsubhāṣitasamgraha (MSS) 8219 はこの Mbh 偈と同一。また、Mbh 3.186.42 の後半がこの偈の前半と一致する。
- 31) 校訂テキストの atru を修正。
- 32) RV が wawa rēñēh と分かち書きするのを一語に修正。
- 33) Cf. Mbh 5.33.50:
 dve karmaṇī naraḥ kurvann asmiml loke virocate /
 abruvan paruṣaṃ kiṃ cid asato nārthayaṃs tathā //
 ほとんどの南方版写本が virocate のかわりに本偈のように mahīyate としていることは特筆される。
- 34) RV は pinūjin としているが、語形と文意から pinuji n と区切る (pinuji > puji “to extol, praise”)。
- 35) RV は校訂注で指摘していないが、Mbh に 2 偈にわたるかたちで対応する表現が見つかっている。
- Cf. Mbh 12.208.10–11:
 kalkāpetām aparūṣām anṛśamsām apaiśunām /
 īdrg alpam ca vaktavyam avikṣiptena cetasā // (10)
 vākprabuddho hi samrāgād virāgād vyāhared yadi /
 buddhyā hy anigrhītena manasā karma tāmasam /
 rajobhūtair hi karaṇaiḥ karmaṇā pratipadyate // (11)
 (10cd–11ab が相応)

- 36) 正確には winistārākēn (> wistara) だが、OJED が winistārākēn のまま 2 箇所 (pp 662: 2208) で引用しているので、暫定的に校訂テキストの綴りに従っておく。
- 37) ñ は校訂テキストにはないが、直前の hana ñ harṣa からの類推、及び OJED の引用例 (p. 1431) から、ñ を補う。
- 38) Cf. Mbh 5.34.74:
abhyāvahati kalyāṇaṃ vividhā vāk subhāṣitā /
saiva durbhāṣitā rājann anarthāyopapadyate //
MSS 2382 はこれと同一である。
- 39) サンスクリット偈では発話の善悪 (正邪) にのみ言及するが、古ジャワ語の解説では、「たとえ美しくとも、話が美しく (正しく) なければ」と述べており、文脈から、前者は話者の容姿のことを指すと読み取れる。
- 40) Cf. Mbh 1.82.11:
vāksāyakā vadanān niṣpatanti yair āhataḥ śocati rātryahāni /
parasya vā marmasu ye patanti tām paṇḍito nāvasrjet pareṣu //
これと同一例が Mbh 5.34.77, 12.288.9, 13.107.57 (ただし、3 例とも ye を te とする)。
- 41) 校訂テキストは ahal とするが、この語 (“in secret”) では意味が通らないので、ahala (“bad, evil”) と読みを修正。
- 42) 校訂テキストの hru を修正。
- 43) RV が dhīra puruṣa と分かち書きするのを修正。
- 44) RV は疑問符付きで mānēb とするが、OJED の引用例 (nēb, p. 1181) にならって修正。
- 45) Cf. Mbh 5.36.7:
marmāny asthīni hrdayaṃ tathāsūn ghorā vāco nirdahanṭiḥa pumsām /
tasmād vācaṃ ruṣatīm rūkṣarūpām; dharmārāmo nityaśo varjayīta //
SS 引用偈と同じく tīkṣṇa- 及び varjayet tām と読む写本が南方版グラント写本の一つにある。RV は指摘していないが、IS 4732 がほぼ同一である (ghorā を rūkṣā, ruṣatīm を uṣāim とする)。
- 46) Cf. Mbh 5.34.75:
saṃrohati śarair viddhaṃ vanaṃ paraśunā hatam /
vācā duruktaṃ bībhatsaṃ na saṃrohati vākkṣatam //
なお、この Mbh 偈の周辺の偈も本テキストに引かれていることにも注目 (SS 125-126)。
- 47) pūrṇa はサンスクリットでは「満たされた」という意味だが、OJED にはそのほかに “restored to its former condition” という解釈も第 4 番目に挙げている。ここではその意味が文脈に当てはまる。さん古ジャワ世界で本来の意味が拡張されて定着していることが興味深い。
- 48) Cf. Mbh 13.107.59:
hīnāṅgān atiriktāṅgān vidyāhīnān vayodhikān /
rūpadravaṇahīnāṃś ca sattvahīnāṃś ca nākṣipet //
デーヴァナーガリー写本には SS 偈のように vīgarhitān と読むものも複数ある。RV は指摘していないが、マヌ法典 4.141 に同様の偈が含まれている (sattvahīna- を jātihīna- とする)。
- 49) 校訂テキストの durbhāga を修正。
- 50) 校訂テキストの tiraskārān tanuyan を修正。
- 51) 校訂テキストの aṅujar を OJED の引用例 (awak, p. 164) にならって修正。

52) Cf. Mbh 12.261.24:

nākrośam archen na mṛṣā vadec ca na paiśuṇaṃ janavādaṃ ca kuryāt /
satyavrato mitabhāṣo 'pramattas tathāsya vāgdvāram atho suguptam //

53) 校訂テキストの makabrataṅ を正しく区切って表記。

54) 校訂テキストは paṇipat とするが、これでは意味がとれないので、upēt (“slander”) の派生語とする (OJED p. 2139)。次の第131偈に対する古ジャワ語解説に anupēt が用いられている。

55) Cf. Mbh 12.115.11:

pratyakṣaṃ guṇavādī yaḥ parokṣaṃ tu vinindakah /
sa mānavaḥ śvaval loka naṣṭalokaparāyaṇaḥ //

RV は指摘していないが、IS 4237がこれとほぼ一致する (第2句が parokṣe cāpi nindakah)。IS の読みは Mbh 校訂版注記によれば多くのデーヴァナーガリー写本と共通する。ただし、SS の引用する偈は parokṣa が処格になっている点のみこれらと相応する。

56) 校訂テキストは yan とするが、OJED の引用例 (crol, p. 335) にならって修正。

57) 校訂テキストの dūran tēmwaṅ hayu を正しく区切って表記。

58) Cf. Mbh 12.130.12:

na vācyaḥ parivādo vai na śrotavyaḥ kathaṃ cana /
kaṛṇāv eva pidhātavyau prastheyam vā tato 'nyataḥ //

北方版の一部と主な南方版写本が、SS と同じく gantavyaṃ としている。

59) Cf. Mbh 1.69.15:

satyadharmacyutāt puṃsaḥ kruddhād āśviṣād iva /
anāstiko 'py udvijate janaḥ kiṃ punar āstikaḥ //

60) サンスクリット偈の ud√vij には、「苦しむ、身震いする、怖れる、退く」といった多様な意味がある。校訂テキストのように願望法で「～すべき」の意味を含むとすれば、「退く、避ける」とするのが文脈に合う。古ジャワ解説者は atakut という語を用いており、“be afraid of” と解釈していることが明らかである。注59に示したように、Mbh では udvijate と反射態現在であらわしており、これだと、古ジャワの解釈が納得できる。つまり、SS でも本来は udvijate となっていた可能性が推測される。

61) サンスクリット偈の āstika (信心ある者) を古ジャワ語解説では dhārmika (“righteous, virtuous”) と受けているのが興味深い。

62) Cf. Mbh 12.169.28:

amṛtaṃ caiva mṛtyuś ca dvayaṃ dehe pratiṣṭhitam /
mṛtyuṃ āpadyate mohāt satyenāpadyate 'mṛtam //

Mbh 校注によれば、SS のように第3句で mṛtyur と読む写本が数多い。

なお、RV は指摘していないが、IS 530 と MSS2524 も同一 (前者は mṛtyur、後者は mṛtyum とする)。

63) 古ジャワ語解説では、サンスクリット偈の死 mṛtyu を毒 viṣa に置き換えており、毒との対比で、amṛta を単なる「不死」でなく「不死の霊薬=甘露」の意味で文脈に組み込んでいる。

64) Cf. Mbh 12.192.61:

na yajñādhyayane dānaṃ niyamās tārayanti hi /
tathā satyaṃ pare loka yathā vai puruṣarṣabha //

デーヴァナーガリー写本や南方マラヤラム写本の複数で SS のように yajñaphaladānāni と読

んでいる。

- 65) サンスクリット偈の *yajñaphala* を単に *yajña* とし、*niyama* を *brata* と言い換えている。
- 66) RV は指摘していないが、古ジャワ金言集 *Ślokāntara* 第1偈がほぼ一致する (*sarvagātra* と *dharma* が複数処格となっている)。安藤2015参照。サンスクリット文献での類例は見つかっていない。
- 67) 校訂テキストの *janmamānuṣa* を正しく分かち書きする (後分が前分を修飾するので、一語としては成立しないため)。
- 68) RV は指摘していないが、*Nāradaśmṛti* 1.207がほぼ一致する：
yaḥ parārthe praharati svām vācam puruṣādhamah /
ātmārthe kiṃ na kuryāt sa pāpo narakanirbhayah //
- 69) 校訂テキストの *ta kārin* を修正。OJED (takari, pp. 1901–1902) によれば、*takarīn* は文頭におかれて、続く節を疑問として提示する。
- 70) Cf. Mbh 12.208.9–10:
avāgyogaprayogena manojñam sampravartate /
vivakṣatā vā sadvākyam dharmam sūkṣmam avekṣatā /
satyām vācam ahiṃsrām ca vaded anapavādīnīm //
kalkāpetām aparūṣām anr̥ṣamsām apaīsunām /
īdrg alpam ca vaktavyam avikṣiptena cetasā //
- 9ef と 10ab が SS の偈に対応。ahiṃsrām でなく ahiṃsām とする北方系写本もいくらかあるが、ほかの読みで共通するものはない。
- 71) 校訂テキストの *inujarakēna* を正しく区切る。
- 72) 「～してはいけない (*haywa* ~)」と具体例を挙げたのち、その否定形に引かれてか、最後のまとめが「これらが不適切な (*tan yogya*) 話し方である」と、論旨がずれてしまっている。
- 73) 前半は対応する句がほかの文献に見つからないが、後半については次の2例が相応する。
Cf. Mbh 3.200.4ab:
yad bhūtahitam atyantam tat satyam iti dhāranā
Mbh 3.203.42cd:
yad bhūtahitam atyantam tad vai satyam param matam
- 74) 写本の *ya* を RV が括弧付きで *yan* と修正した読みを採用する。
- 75) サンスクリット偈では誠実 *satya* と不実 *mṛṣā* の相違を、真実の有無ではなく、生類の利するか否かで評価している。古ジャワ語解説はその本質はとらえているが、*mṛṣā* のかわりに *mithyā* を用いて、「たとえ話が *mithyā* であっても (生類のためになれば) *satya*」という文脈でも同じ *mithyā* を使うため、論旨の理解に誤解を生じさせる。
- 76) RV は指摘していないが、*Hitopadeśa* 1.43が第4句以外は一致する：
dharmārthakāmamokṣāṅām prāṇāḥ samsthitahetavaḥ /
tān nighnatā kiṃ na hatam rakṣatā kiṃ na rakṣitam //
- これは IS 3121 と同一である。
- 77) 注76に示した偈では、第4句は「(命を) 守るものによって守られないものはない」という意味で、第3句と対になっている。しかし本偈では直前の第140偈を受けて *bhūtahita* という概念を後から組み込んで読み替えたためか、第3句との対比が崩れ、論旨に無理が生じて、意味が取りづらい。
- 78) SS 第7偈及び第223偈でも、*dharma*・*artha*・*kāma*・*mokṣa* つまりヒンドゥー教徒にとつ

ての人生の四大目的について、古ジャワ語解説で *caturaṅga* と総称している。安藤2018参照。
79) Cf. Mbh 12.251.21:

jīvitum yaḥ svayaṃ *cecchet* *katham* so ‘nyam *praghā*tayet /
yad yad *ātmana* *iccheta* tat *parasyāpi* *cintayet* //

Mbh 校注によれば、SS 偈のように *jīvitam*、*hīcchet*、*ātmani* と読む写本も複数あるようだが、ある一つの写本の読みが SS 偈と完全に一致するわけではない。

80) 校訂テキストの *nahat* では意味がとれず、OJED の引用例 (*harimbawā*, p. 595) を参照して修正。

81) 後半のみ、Mbh 校訂版には採用されていない異読に対応句が見つかっている。Mbh 13.115.14の後に、南方版のテルグ、グランタ、マラヤラムのいくつかの写本に次の偈が含まれる：

bhasma *viṣṭhā* *kṛmir* *vāpi* *niṣṭhā* *yasyedṛśī* *dhruvā* /
sa *kāyāḥ* *parapīḍābhiḥ* *katham* *dhāryo* *vipaścītā* //

82) *inuni* という形のままでよいのかどうか不確かなので校訂テキストのままにしておくが、サンスクリット偈の *dhāryate* に相当する箇所なので、*inū* の派生形 (“to take care of, treat with care” を含意) と推測される。

83) 前半は注81に示した Mbh の異読の前半に相応する。後半は第143偈後半と同様な意味をもっており、ある意味では稚拙に真似て付加した感がある。SS の編者が、本来の一偈を自ら増広したという推測すら可能であるし、あるいは、伝承過程で2つの偈に増広されていたものを SS に取り入れたのかもしれない。

84) Mbh には典拠が見つからないが、偈の前半は、*Brahmapurāṇa* 61.16ab および *Yogavāsiṣṭha* 6.26.3ab ほぼ一致する (両者は完全同一)：

gacchatas *tiṣṭhato* *vāpi* *jāgrataḥ* *svapato* ‘*pi* *vā*

後半はどの偈も異なる展開となっており、この半偈はいわば常套句として利用されているとみられる。

85) RV は指摘していないが、MSS 7412 がほとんど一致する：

ekam *sūte* *mṛgāriṇī* *bahūn* *sūte* *vṛkī* *sutān* /
uttāraḥ *pralayaṃ* *yānti* *nādyamānāḥ* *kathaṃcana* //

86) OJED によれば学名 *Cervulus muntjac* (“the barking deer”)。

87) RV は指摘していないが、*Manu* 5.46 は多少異なるものの用いる語句はほぼ同一であり、同源あるいは典拠とみられる：

yo *bandhanavadhakleśān* *prāninām* na *cikīrṣati* /
sa *sarvasya* *hitaprepsuḥ* *sukham* *atyantam* *aśnute* //

Manu では殺生や肉食を諫める箇所にあたる。

88) 前偈につづき *Manu* 5.47 と相応する：

yad *dhyāyati* yat *kurute* *ratim* *badhnāti* *yatra* ca /
tad *avāpnoty* *ayatnena* yo *hinasti* na *kiṃ* *cana* //

IS 5269 も *Manu* とほぼ同一 (*rati-* を *dhṛti-* とする)。

89) Cf. Mbh 13.116.8:

rūpam *avyaṅgatām* *āyur* *buddhim* *sattvaṃ* *balam* *smṛtim* /
prāptukāmair *narair* *hiṃsā* *varjitā* vai *kṛtātmabhiḥ* //

前半で列挙される項目が SS 偈とずいぶん異なるが、異読の中にも SS 偈と共通するものは見られない。

90) Cf. Mbh 13.117.22:

abhayaṃ sarvabhūtebhyo yo dadāti dayāparaḥ /
abhayaṃ tasya bhūtāni dadatīty anuśūrumaḥ //

RV は指摘していないが、MSS 2250はこの Mbh の偈と同一である。なお、RV は Manu 6.27 への参照を言及するが、実際は一部の表現が類似するのみである：

yo dattvā sarvabhūtebhyaḥ pravrajaty abhayaṃ grhāt /
tasya tejomayā lokā bhavanti brahmavādinaḥ //

91) abhaya を sarvabhūta (sarvabhāwa) に与えれば、それが自分に返してもらえるということは、古ジャワ解説でも的確に述べられているが、「現世でも来世でも」とは明らかに踏み込んだ叙述である。

参考文献

Böhtlingk, Otto

1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).

Ganguli, K. M. (tr.)

2002 *The Mahabharata of Krishna-Dwipayana Vyasa*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Gonda, J.

1998 *Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (reprint).

Johnson, F.

1847 *Hitopadeśa, the Sanskrit Text, with a Grammatical Analysis, Alphabetically Arranged*, London (digitized).

Mandik, V. N. (ed.)

1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Monier-Williams, M.

1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).

Raghu Vira

1962 *Sāra-samuccaya, a Classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.

Sastri, R. A. (ed.)

1940 *Pasupata Sutras: with Pancarthabhashya of Kaundinya*, Trivandrum.

Sharada Rani

1957 *Ślokāntara: an Old Javanese didactic text*, New Delhi.

Sternbach, Ludwik

1974–2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.

Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)

1933–66 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.

Zoetmulder, P. J.

1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.

安藤 充

2015 古ジャワ金言集 Ślokāntara 訳注研究(1) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀

要) 第30號, pp. 83–104.

2018 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(1) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第33號, pp. 117–137.

2019 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(2) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第34號, pp. 141–167.

2020 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(3) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第35號, pp. 159–183.

渡瀬 信之 (訳)

1991 『マヌ法典』 中公文庫.

【電子情報】

Brahmāṇḍapurāṇa

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpus/transformations/html/sa_brahmANDapurANa.htm

Hitopadeśa

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpus/transformations/html/sa_nArAyaNa-hitopadeza.htm

Mahābhārata

<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html#MBh>

Mahāsubhāṣitasamgraha, verses 1–9979

https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm

Nāradaśmṛti

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpus/transformations/html/sa_nAradaśmRti.htm

Pasupatasutra: with Kaundinya's Pancarthabhasya

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskr/4_rellit/saiva/pasupbhu.htm